

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 V



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

V

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 V

平成七年三月三十日 印刷

平成七年三月三十日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三番十三号
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 株式会社ニッケイ印刷

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉しやの念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立された。

基金法には、この目的を達成するために行うべき各種の業務が定められているが、この「平和の礎——軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦——」の作成は、その中の関係者の労苦に関する調査研究並びに関係者の労苦に関し、出版物を作成し及び頒布する業務に係るものである。

この業務の実施に当たり、基金は、平成元年度から社団法人元軍人軍属短期在職者協力協会に、主として次の三つの観点から従軍体験者の手記の執筆あるいは聴き取り等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきた。

(一) 兵役と家族状況

(二) 軍務・戦闘と意識

(三) 復員後の生活と家族

また、執筆等に当たっては、より掘り下げた実態の描写をねらいとして、長編の労苦記録の作成に努めるとともに、労苦の総合的な把握に資するため多くの記録者等は触れていないが、記録と密接に関連する所属軍・師団等の編成、作戦行動等の分野について、軍短協の調査研究の成果を「解説」として付することとした。

協会では基金からの委託に基づき、全国的に広範囲にわたり活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多

くの体験記等を収集し整理の上、「恩給欠格者に係わる労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされた。

報告された労苦記録の各篇々には、中国、南方、旧満州等各地で軍務に服し、過酷な戦闘体験を始めとして特に短期の軍務服役であるため、階級、身分の差による辛酸などの多様な労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれている。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であるので、戦争の残虐さ、残酷さ、悲慘さ、その上いかに無意味なものであるか、翻って、平和がいかに尊いものであり、大切なものであるかを教えてくれるこの上なく貴重なものである。したがって、軍人軍属短期在職者の労苦を徒労に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は永く保存され周知されるべきものと思料する。

最後に、調査に当たられた協会関係者のご努力と寄稿された多くの方々のご協力に感謝するとともに、本書が平和祈念の書としてたくさんの人に読まれ、平和の一助となることを願うものである。

平成七年三月

平和祈念事業特別基金

理事長

勝 又 博 明

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

V

目次

まえがき

勝又 博明

第一部 労苦体験記

〔南 方〕（フィリピン）

呪縛の時代

松田 勇 1

比島フガ島戦について

船橋 利平 11

〔南 方〕（ビルマ）

独立輜重兵第二連隊

原田 幸雄 18

ビルマ作戦に生き抜く

一兵士のビルマ雲南戦記

岸川 力蔵 31

〔南 方〕（その他）

ガダルカナル島戦記

三矢 猶吉 47

レンバン島多根岬

猪瀬 良一 54

レンバン島追想

星野 辰司 62

終戦後シンガポール ケッペル収容所

松塚 才治 67

〔大 陸〕（満州）

今も心に、赤い夕日の満州が

岩城 秀夫 78

〔大 陸〕（北支）

戦争と新兵教育

日置 栄 87

北支派遣軍 内蒙古でのめぐり逢い

杉浦 寛弥 97

〔大 陸〕（中支）

徐州戦 北川中隊五十八勇士の決死隊

川戸庄治郎 104

中支分路口分遣隊

小林 年男 111

荒漠千里

金子 富栄 119

〔大 陸〕（南支）

南支独混第二十三旅団 私の戦争体験

佐藤 武夫 130

〔航 空〕

あの日から五十年

三田 全二 136

東金飛行場大隊 労苦体験記

及川 春幸 143

〔その他〕

私の軍隊体験
若き日の追憶

永浜 曉 155
大森 学 162

第二部 聴取調査記録

〔南 方〕（フィリピン）

比島遁走記

水野 稔 173

比島バターン攻略戦

岸本栄太郎 177

フィリピン生き残り 盟兵団の通信兵

鈴木 寅吉 181

〔南 方〕（その他）

北満から南海の孤島クサイ島へ

高橋 茂清 188

南方軍補充要員

植田 太郎 194

ブケット島で強制労働

ラバウルの想い出

高橋 正巳 197

歩兵第五十四連隊（月兵团）地獄の転進

小林 元春 200

戦争後期—マレーシアの従軍記—

唐沢甲子雄 205

濠北派遣搜索第五連隊

神在 繁 209

—海難ニューギニア防衛戦—

インドネシア独立の先兵

神崎 芳郎 215

兵補教育と終戦

奇しき運命の転機 ラバウルから生還

奥村 昇 221

アッツ島要員が南方スマトラ勤務

小山 信一 227

ラバウル戦線記録

外園 肇 231

南方抑留レンバン島

羽田野正義 244

〔大 陸〕（満州）

満州でソ連軍抑留

楠 政巳 251

満州清明村開拓団

勝 智 258

—南方独混三七旅団通信隊—

満州の衛生兵勤務—兄の遺児も幸せに—

西岡 敏夫 263

ソ連に連行されず 民間人で復員

阿部圓次郎 268

東安病馬廠隊員農奴となり奇跡の生還

角野喜三郎 272

〔大 陸〕（北 支）

回想（北支春二部隊）

加藤 一夫 280

戦車第三師団工兵隊 河南作戦

小山 正三 286

我れ驚兵団で戦へり

支那事変では北支で戦闘

——戦争末期は内地飛行場大隊——

三十四歳で初召集

妻子を残し河南作戦に参加

〔大 陸〕（中 支）

独立重砲兵 第六大隊桂林攻略戦

渡河材料中隊

中支戦線の思い出

思い出の軍隊生活

中支宜昌付近の戦闘

——第十三師団歩兵一〇四連隊——

中支を征く（百六師団）

清水 渡 289

伊藤 徳二 298

伊藤 三十郎 302

元木 富士男 307

三津田 泰永 310

岡崎 哲夫 313

長谷川 賢次郎 319

加藤 清一 330

羽田 野 徹 339

海南島掃討戦

——海軍第十五警備隊——

——船団護衛——

海防艦戦務一筋

——第九特別根拠地隊——

「あわが戦友山尾隊」

小栗 浩嗣 352

末宗 勲 357

山尾 萬樹 365

〔航 空〕

航空情報隊 満州より本土防衛へ

通信部隊の裏方話

戦友はビアク島で玉碎

——航空兵転科で生き残る——

台湾航空情報部隊

河村 直衛 370

長谷川 峰尊 374

藤尾 健造 384

伊地知 薫 387

〔そ の 他〕

東奔西走

——野砲と共に——

幸運な第九師団

——開拓義勇軍から満州、台湾へ——

青木 長吉 394

七山 幸雄 397

私の戦争体験

海軍の通信

——予科練習生の教育——

暗号将校が少年飛行生徒の教育

鎌倉 繁治 400

運命か否天命だった我が従軍記録

富田 磯海 407

海上特攻艇始末記

長岡 清彦 417

——ト号作戦出撃せず——

シベリア送り員数不足

金丸 元美 424

北鮮で戦後の召集

あとがき

南方（フィリピン）

呪縛の時代

兵庫県 松田 勇

私は大正十年に、岡山県の片田舎に生まれました。

貧しい農家の五人兄妹の三男で、高等小学校卒業と同時に志を立て、大阪・名古屋・尾張一の宮と理髪師として修業をしまして、姫路市で職人として働いていました。

中国大陸における戦争は拡大し、ついに、太平洋戦争（第二次世界大戦）にと発展しました。国民精神総動員・物価統制・職業整理令等々で、個人の自由が束縛されて、すべてが軍国色になりました。

私にも昭和十六年四月に徴用令が来ました。「大阪陸軍兵廠・播磨製造所へ入所せよ」の命令です。説明会場には、当時鬼より恐い憲兵が二名来ていました。誰一人文句もいわず、話を聞いていた。「質問がある者は申し出よ」といっても、寂として声なく。「一週間後に播磨製造所へ入所を命ず」で幕でした。

入所式当日は、まるで刑務所にでも入るように、妻子と表門前で別れを惜しんでいる人もいました。入所後は集合訓練が十日程あり、数十名づつ分散合宿させられ、朝七時から夕方七時まで作業見習教育が行われました。

一か月後に、観閲点呼がありまして、初めて一人前の軍属工員として各職場に配属させられました。私は十五トンの電気溶鉱炉でした。千数百度の高温で溶解

した鉄の熱湯です。これが大砲になったり、弾丸になるのです。砲身鋼の時は特に嚴重な分析を行います。その都度、マンガン鉞とか、いろんな金属を混入して試験を行います。その都度炉口を開いて、スコップで投入するのです。身体からは汗が滝のように流れるので、腹にタオルを巻いていますが、それを取って何度となく絞ります。塩分が不足するからと云って、水道の傍に岩塩とコップが用意されて、水を呑む時に必ず塩も一緒に呑みました。

電気炉は一分も休ませず操業しますから、自然勤務時間も二十四時間体制でした。一日二交代制で朝七時と、夕方七時の昼番と夜番でした。宿舎との往復、食事、入浴等々で自分の自由時間は八時間程でした。

八月のある日、宿舎に帰ると、故郷の母から電報が来ていました。

「召集令状が来た何日に姫路第五十四部隊へ入隊せよ」でした。即、舎監に申し出て、工事並びに担当の陸軍兵技中尉と同道して工場長の陸軍中佐に申告して故郷の岡山県へ帰りました。

家では長兄は軍属として輸送船で南方の島に行っていました。次兄は数日前に北支戦線より凱旋除隊したところでした。近隣の古老が「今度は兄に代わって不義を撃つのだ、頑張ってこい」と檄を飛ばされて、出征しました。

五十余年を経過した現在、往時を振り返って、何んの不思議、惑いもなく、滅私奉公に、ただ一途に突き進んだものでした。陸軍二等兵の軍服を着用して、帝国軍人としての本分を全うした。

初年兵で一番苦勞するのは、軍人勅諭と戦陣訓の暗記だった。私は前記の軍属の時に宿舎で同室であった二人が元軍人であったために、軍人勅諭と戦陣訓を教えられていて、両方共暗記していました。

一期の検閲直後に満州に向かって出動しましたが、出陣式の砌、時の部隊長・北園豊蔵大佐殿より、衆の範であると、全員整列の前にて表彰状を賜りました。以後この表彰状が私としては終戦まで重荷でした。たえず自分は出来るのだ。「やれるのだ」と自問自答し、心身を励ましてやりました。その結果玉碎的戦闘でも、

生き延びたのでしょうか。現在も不思議だと思ひます。

満州国三江省佳木斯、満州第一二四部隊に昭和十七年十月十一日着任しました。在満期間一年九か月でした。その間の訓練たるや、たえず実践しながらの猛訓練でした。部隊は師団輜重隊で私の所属は第二大隊です。第一は挽馬大隊で、第二は自動車大隊です。戦争有事の時は戦時充当車両といつて（ガソリン）走行の立派な車両を特別に格納して、たえず万全の整備を行っていますが、日常訓練・演習には木炭や薪をつかつて瓦斯を発生させて、それを燃料として、車を走行させるのです。今申し上げても理解に苦しまれるでしょう。この瓦斯発生装置の釜を運転台の背中に設置して、この瓦斯の発火時に、よく火傷をしたものです。自動車隊は、兵員・弾薬・糧秣・医薬品等々を、長距離にわたつての輸送が主任務です。その為敵から攻撃され易く、全員が歩兵訓練を受けます。特に飛行機と落下傘部隊及びゲリラ等に対する警戒警備が一番重要でした。また、満州の冬期間は、どこでも自動車

は走れますが、春の雪解期から、晩秋までは、湿地や沼地が多く、一番苦勞しました。湿地通過演習の時は工兵隊のように橋を造つて渡つたのです。冬期の大地が鋼鉄のように凍つた時は、自動車が横向きに走るようなこともありました。

一車両に操縦手・助手・搭乗者と三名が乗車します。操縦手は運転と機関整備、助手は燃料と足回り（タイヤ）、搭乗者は積載物の確保点検と敵の飛行機やゲリラ等に対する警戒等々、それぞれ各部位について責任を持つて活動しました。関東軍百万人といった。関東軍特別大演習（関特演）、ワ号・ナ号・師団演習等々の大々的演習は勿論、連隊・大隊・中隊と各各、規模の大小に係らず、実に苦しい訓練をやらされました。

ソ連との国境も長く、その国境線が黒龍江です。氷が解けて河面に春を感じ出したら漁船が出て漁勞を始め、定期便の船が上り下りし出します（外輪船）と、これに警乗兵として乗船するのです。下士官と兵五・六名が現地人の衣服を着用して、対岸の地形・地物、特にソ連軍の施設等、一切目にした物体はすべて記憶

して帰って報告するのです。

私も警乗しました。大隊長から「いざ鎌倉という時のためだ、充分心して行ってこい」といわれましたから、誰にも気付かれぬように、自分自身の暗号で「日記」に非ず「時記」をメモしたものです。その時、ソ連の海防艦に停戦を命ぜられ、一寸困惑しましたが、無事でした。でも万一の場合はと、便衣の服の中で十四年式拳銃を握りしめていました。ソ連兵が去って、手には、ビッシヨリ汗が溜っていました。

昭和十九年四月より、丁度ソ連ハバロフスクの対岸で、同江や富錦という地点に、一大築城陣地構築のために師団を挙げて工事を行いました。その作業の途中の七月二十八日。大本営発令「忠霊塔に日の丸立つ」の極秘電報が師団司令部に入りました。動員下令です。即ち出動となります。

顧みれば在満一年九か月、誠に厳しい日々でした。極寒零下四十度、また夏期は炎熱の下での猛特訓、身の毛もよ立つ思いでした。

通達があり、以後第十師団輜重兵第十連隊の号でな

く、鉄五五四部隊と呼称せよ。そして靖国神社への入門札だといって渡されたのは真鍮製の認識票です。

私の番号は「鉄五五四・一七八・二六」でした。この札を入浴時も肌身放さず、首から左肩に掛けて左胸の上にあり、終戦後の捕虜として抑留されるまで、大切に所持していました（現在も保存）。認識票は戦死した時の身元確認のために、全軍人が肌身放さず所持していた。

八月四日、先発隊として、佳木斯第一二四部隊を出発して釜山にて乗船出航しました。門司に全船集結して船団を組んで出航しました。堂々の輸送船団でした。前後左右に、たくさんの駆逐艦や駆潜艇、海防艦に護衛されながら一路南に向かって航行しているようでしたが、時には東に向かったり北に進んだりしています。敵潜水艦の攻撃を避けての航行でした。

台湾の基隆に上陸したのは八月二十八日でした。門司から二週間して到着したのです。因みに師団通稱号は次の通りです。

師団司令部 岡本保之中将

鉄五四一〇部隊

歩兵第十連隊（岡山） 鉄五四四八部隊

歩兵第三十九連隊（姫路） 鉄五四四六部隊

歩兵第六十三連隊（鳥取） 鉄五四四七部隊

搜索第十連隊（姫路） 鉄五四五〇部隊

野砲兵第十連隊（姫路） 鉄五四五一部隊

工兵第十連隊（岡山） 鉄五四五二部隊

輜重兵第十連隊（姫路） 鉄五四五四部隊

通信第十連隊（姫路） 鉄五四五三部隊

兵器部勤務隊（姫路） 鉄五四五五部隊

防疫給水部 鉄五四五六部隊

第一野戦病院 鉄五四五七部隊

その他第二・第四野戦病院。制毒隊。病馬廠等々に通稱号を付してあった。

なお、兵団は昭和十五・十六・十七年徴集の現役兵が主幹の精鋭師団でした。台湾・台中に司令部を置き、各部隊が台湾全島に分散配備に付きました。因みに鉄兵団総兵力は一万三千名であった。私は台中の南三十キロの彰化街にいました。勿論部隊本部、二大隊本部と一緒に、楠木小学校を兵舎として使用しました。各

中隊及び小隊は全島に分駐して、それぞれ任務に付いていた。中には、山奥の水力発電所まで入りこんでいました。

台中の兵団本部に毎日のように出張して命令・会報の受領等に自動車を走らせた。

ある時、近々に敵襲があるかも知れぬということで交通の要路や鉄道、特に橋梁や鉄橋に対する防御のために（煙幕作戦）材木や青草を集積せよと命ぜられたこともあり、橋や鉄橋の下等に収集しましたところ、はからずも十月十二日敵飛行機の襲撃を受けました。

数少ない友軍機が迎撃に飛び立って遥か上空にて空中戦を展開しました。何分敵機の数が多くて、地上物に對しても爆弾を投下し味方の飛行場もかなりの損害を受けました。前記橋梁等は青草を燃やして煙幕を張って守りました。中には、小銃で対空射撃を行った者もいたと、後で聞きました。私は釜山を出港した時に敵襲を受け、この度で二度目の敵襲でした。一応敵の上陸もなく、ただ防衛の任務で平穏な毎日でした。

捷号作命発令により、十二月三日彰化駐屯地を出発

して、隊列を整え、嘉義より初めて南十字星が見え
ました。兵団は第一船が「青馬山丸」に乗船して、先発
しました。輸送指揮官、歩兵第三九連隊長永吉実展大
佐で部隊は、歩三九・二個大隊・搜索第十・野砲第十
・工兵第十・輜重第十の各連隊の大隊・中隊・その他
でした。

本船は「レイテ島が、目下米軍が上陸して激戦中で
ある。依って敵の後方に逆上陸して敵を粉碎すべし」
という命令を受けましたが、時既に遅く、上陸不可能
でマニラに上陸ルソン島防衛の任に付くことになりま
した。

兵団主力は十二月十三日、高雄港を出港。「江の島
丸」「大威丸」「乾瑞丸」の三船に各部隊を混成して乗
船させて、海軍の護衛艦も数少ない中を、敵飛行機や
潜水艦の攻撃の目を掠めて比島に辿り着きました。

「江の島丸」は輸送指揮官・歩兵第十岡山連隊長で、
乗船部隊は歩兵第十の二個大隊を始め野砲・輜重等の
各兵科で、ルソン島最北端のアバリ港の東方六十キロ
のカサブランカに上陸しました。しかしこの上陸に手

間取り、船舶司令部よりの命令で揚陸兵器及び物資を
半数船舶に積んだまま、台湾へと引き返しました。

「大威丸」は輸送指揮官・歩兵第六十三連隊の林部
隊長で、乗船は歩兵第六十三連隊の二個大隊を始め各
兵科の大・中隊とその他が分散乗船して二十三日十時
に北サンフェルナンド港に入港、全兵員・全物資を揚
陸しました。

これ以下の私の行動（労苦）は、平和の礎に「比島
散華」と題して掲載をして頂いています。

「乾瑞丸」は輸送指揮官・輜重第十連隊長鍋島英比
古閣下の下に各兵科が乗船し、入港三十分前に、敵潜
水艦の発射せる魚雷三発を船腹に受けて轟沈しました。
瞬時にして一千二百余名が水く屍となられたのであり
ます。波穏やかな紺碧の海底深くに今も御遺体は眠り、
御霊は天翔けて故郷へ、また靖国のお社へ行かれたで
しょうか。

上陸部隊はそれぞれの戦場において、死力を尽くし
て戦われました。その状況たるや、凄惨・壮烈そして
悲慘の極でした。一片の肉片すら残さぬ爆死、擦過傷

現在も悪夢にうなされている。合掌。

【解 説】

平和を祈念し世界の恒久平和を維持するための事業の重要な課題の一つは戦没者慰霊である。特にフィリピンにおいては概数五十一万八千四百名の軍人、軍属が非命にたおれ、まだ御遺骨の収集されぬ地域もある。執筆者松田勇氏は本書において、第十師団輜重兵第十連隊の満州駐留、比島への海上輸送中の惨事、上陸後終戦に至る苦難を記されておる。同氏は更に、度々ルソン島現地に御遺族共々慰霊巡拝、慰霊祭を挙行されている。

同部隊は、昭和十五、十六、十七年徴集（大正九・十・十一年生れ）の現役兵を主体とした精強兵団であるが、輸送途次僚船を失い、戦備未だ整わざるうち、昭和二十年の上陸米軍と戦闘し、損耗率九十％という玉碎に近い犠牲を出した。

同氏等は先年挙行の鉄五五四会（輜重兵第十連隊生存者、遺族）の慰霊巡拝に参加された。その時の

にて皮膚は破れ血膿とウジ虫にさいなまされ、貫通銃創を受け、弾丸や破片が体内に食い込んだままで、看護も手当もなく戦いながら戦場の露と消え去った戦友。制空権は敵が制して、我が物顔で飛び回り、中でも観測機が超低空飛行をして（搭乗者の顔）笑いながら、手榴弾を投擲して去る始末です。地上軍は、私達の想像も出来なかった装甲の厚い重戦車を押し進め、火炎放射器で焼き払い、長距離砲での集中砲撃等々。どれ一つ取っても太刀打ち出来る戦争ではなく、ただ単なる労苦として、一片の書にすることは出来得ぬ戦争でした。

すべての補給が途絶して、精神力のみでの戦は無茶苦茶です。飢餓が迫り、病魔が襲って来ました。誠に凄惨というか、壮烈無比の生地獄を私は体験しました。その上に戦後の抑留生活（PW）としましても最大の屈辱を体験させられました。武勲を立てた英霊は一言も語らず、また、幾十万の敗戦の兵も黙して語らずであります。ただ二度と戦争を行っては駄目だ。平和ぐらい尊いもの、有り難いものはない。半世紀を経た